



公益財団法人  
福島県労働保健センター

様

ソリューション : PAXiS Screening

**手作業のレポートングを PAXiS Screening でシステム化。オフラインレポートを導入し、オンライン、オフライン問わないスピーディな読影環境を実現。**

公益財団法人福島県労働保健センター

<http://www.flhc.or.jp/>

業務内容 : 各種健康診断実施業務  
(院内・巡回)

代表者 : 理事長 佐藤 卓也  
関連施設 : いわき健診プラザ

住 所 : 福島県福島市

郡山事務所

設 立 : 1991年3月



働く人の健康保持と労働衛生・産業医学の発展を目的に1991年3月に設立。2012年4月に公益財団法人として新たな体制をスタートさせ、福島県内で働く労働者や一般市民の予防医学の普及推進を図っています。2020年8月にPAXiS Screeningを導入し、それまでのPACSからデータを移行。同年10月から胸部レントゲン、胃部レントゲン、マンモグラフィー、眼底カメラ検査の所見入力を既存の紙運用からPAXiS Screeningによるシステム運用へと切り替えました。システムの導入プロジェクトチームの皆さまから、導入の経緯やその後の効果についてお話を伺いました。

### ■ システム導入までの経緯を教えてください

既存のPACSを導入したことでフィルムレスの運用は実現していましたが、所見結果は紙の読影簿へ記入していました。多くの施設で同様の運用をされていると思いますが、大量の読影簿を突き合わせ、内容を一つひとつ確認してシステムに手入力する作業は効率が悪く、多くの時間と労力を費やします。また、入力ミス等も起こりうるため、作業後のダブルチェックにも時間がかかっていました。

るPACS更新だけではなく、併せてレポートシステムの構築を検討しました。

### ■ PAXiS を選択された理由を教えてください

複数のメーカーを検討しましたが、健診向けのレポートシステムとして十分な機能が搭載されていることと、健診施設への豊富な導入実績から当施設の運用や悩みをよく理解していただけたことが決め手でした。

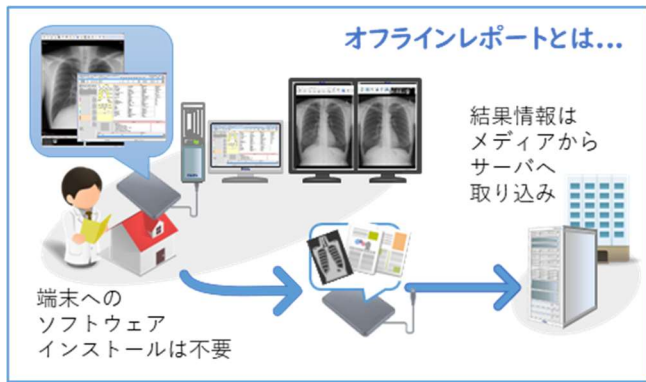
例えば、胸部検査ひとつとっても、請け負う事業所によってレポートのマスタや読影方式が異なることはよくあるのですが、PAXiSでは複数マスタの切り替えに標準で対応していました。また、外部の読影への読影依頼でレポートシステムを利用するために、全施設をネットワーク接続するには費用とセキュリティの面で非常に困難ですが、PAXiSではネットワークなしで読影と所見入力ができるオフラインレポート機能(※)が搭載されていました。

※オフラインレポート:メディア内で読影と所見入力が行える機能。メディアを送付すれば、端末にインストールすることなく所見登録が可能。



公益財団法人福島県労働保健センター  
導入プロジェクトチーム

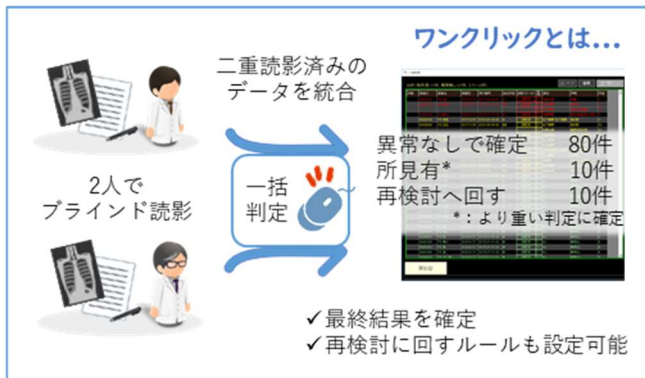
PACSの更新時期を迎えたところで改めて業務全体を見直し、業務の効率化や作業の負担軽減のためには、紙の読影簿をレポートシステム化する必要があると感じました。そこで、単な



## ■ PAXiS 導入後、運用はどのように変わりましたか？

今回、レポートシステム化した検査種に関してはほとんどの運用で紙の読影簿がなくなり、医師が入力した所見結果が健診システムへデジタルデータで取り込めるようになりました。おかげで事務作業が大幅に効率化されました。

システム導入前は、読影簿の手書き文字や判定の難しい「○」の位置を読み解きながら事務職員が一つひとつ処理していたため、一次読影から二次読影に進める作業だけでも事務職員 3 人がかりで丸一日かけて行っていました。これが、システム導入後はワンクリック（1 ボタン）、ほんの数秒で終了できるようになりました。



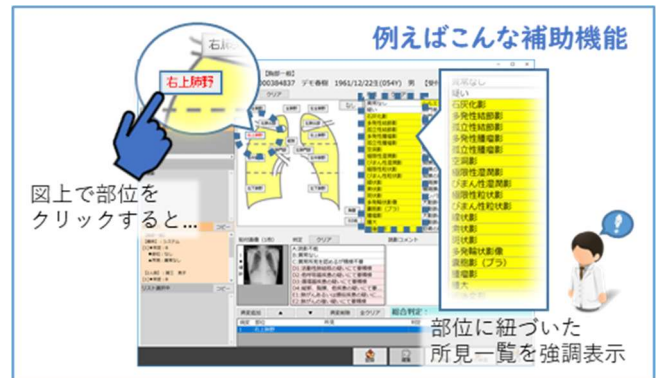
また、健診システムへ手入力する情報が減ったため、作業時間が削減されただけでなく転記ミスの心配もなくなりました。

さらに、PACS に取り込んでいなかった眼底カメラの画像もこの機に DICOM 化し、PACS で統合管理した上でレポートのデジタル化を行いました。これにより、課題のひとつであった“検査データの一元管理”を一步進めることができました。

その他にも、一次読影から全検査の過去比較読影が可能になったこと、健診システム側の受診者属性情報の変更を PACS とレポートシステムへ自動適用するよう連携したことなど、今までできなかったことが実現されたことで運用面が大きく改善されました。

## ■ 読影医の先生方からの評判はいかがですか？

医師からも「前より楽になった」と好評をいただいています。PAXiS ではワンクリック（1 ボタン）の「異常なし」登録と次受診者画像への遷移や、誤入力を防止するための部位・所見入力ガイド、必須項目の未入力チェック機能などの入力補助機能があります。また、健診システムから取得した既往歴や問診情報などの必要な情報を Viewer の画面上で確認できるため、画面遷移や視線の移動も最小限ですみます。このような、読影をスムーズに行うための様々な工夫が施されているため、従来の“モニタ診断+紙の読影簿への記載”よりも医師の負担が減り、読影が楽になったと感じているようです。



また、PAXiS に切り替えたときに、今までネットワークを利用して読影していた外部の先生も「オフラインレポート」による運用となりました。諸事情でネットワーク運用が難しいことから“妥協案”としてオフラインレポートの利用を始めたのですが、結果的にこれまでよりも画像の表示が早く、紙への入力もなくなったことで読影に係る時間と労力が大きく軽減されました。「これなら今までの 3 倍読影してもいい」とおっしゃる先生もいます。

## ■ 今後の課題・抱負をお聞かせください

今後は、心電図検査や超音波検査も PAXiS で一元管理し、レポートシステム化したいと考えています。特に検査数が多く、紙も多用している心電図検査の判読がデジタル化されれば、さらに業務効率を向上させることができると想定しています。

次のステップが具体的になってきたことで、新たな課題も見えてきたところです。PAXiS でこれらの課題を解決し、健診業務のさらなる効率化を進めたいと考えています。

— 福島県労働保健センター 導入プロジェクトチームの皆さま、貴重なご意見・ご感想ありがとうございました —